

アンドレ・ジッドの方法 XIV

——『インモラリスト』— そのマニュスクリを追って (4) ——

鈴木 たけし

I. レジューメ

方法 XI, XII, XIII に続き、ジッドの『インモラリスト』のマニュスクリを少しずつ追っていく。

今回は、第一部, III, pp.386-391 (プレイヤード版) にとどめる。(頁, 行は論末テキスト文のものです。)

第一段落 p.16 l.1-p.17 l.29

母を失なった後、すぐ結婚したミッシェルは、アルジェリアに旅立つ。旅中、病に倒れ、妻マルスリーヌの献身的看病をうける。ビスクラに滞在。はじめ消極的な病人が、積極的に回復しよう、生きようと努め始める…。

まだミッシェルは、回復したとはいえない。息切れに苦しむ。全てに無関心となり、ひたすら呼吸するためのエゴイスト。さらに気温にいたく敏感となる。寒さと熱が交互におそう。結核のせいではなく神経症か。夜、窓を開け放して寝る。そうしないと息苦しい。

しかしミッシェルの話しぶりは、未来に開かれ始める。彼はいう、感覚は体が強いかわいかわい、快とも不快ともなる。かつて苦しんだ病的な敏感さは、今は甘美となった。窓を開けて寝るのは、今や心持よい。ベットに夜風が流れ月光がさす。感覚はあまねく心持よい喜びとなるかたわら、精神は忘れ去られる。

第二段落 p.17 l.30-p.19 l.108

一刻も早くよくなりたい。彼は思い切って妻と公園に出かける。現実の存在が生生としている。ミモザの蔭の散歩道、ベンチ、道にそう水路、木木に水をうるおす用水路、水はバラ色と灰色の粘土の色、そして光と影。

奇妙なふるえを感じるが、何ら気分は悪くない。やがて妻の知るアラブの少年達があらわれる。人が動き群れる現実の中、不快感がもどる。しかしそれは、肉体からではなく、マルスリーヌへの不快だ。彼女が自分のいちいちの動作に干渉するからと。彼女の夫への気づかいにすぎないが、

彼は、一人で公園に来ようと心のうちできめる。

翌日、バスルと出かける。身も心も軽い。バスルは犬のように柔順。小川の洗濯場で彼の妹に会う。水遊びをする彼女の足は、湿って色濃くみえた。そこに母親がやって来る。青い刺青をひたいにほどこし、洗濯籠を頭にのせる彼女は、重重しく、古代ギリシアのカネポロス祭の処女に似ている。母は子たちに手伝うようしかり、しかたなくミッシェルは一人で去る。

困っている彼は、アシュールに出会う。色黒で、活発で、おしゃべりで、片目だが美しい少年。彼は、水路が公園からオアシスを横切って流れていくことを話す。ミッシェルは新しい出会いに幸せを感じ、ひとりで公園に来て偶然の出会いを期待する。

帰宅、妻に配慮してアシュールを家にあげなかった。家では、病弱な子を妻が世話していた。彼は後悔する。妻の遠慮深い言葉と彼のいらだつ気持が交錯する。心やさしいマルスリーヌに、なぜ一人で外出したいかを彼は説明する。彼のわがままは、説明とは言い難い。

第三段落 p.191. 109-139

また翌日、ミッシェルは一人で外出する。晴天。大気はおだやかであたたかい。でも誰かとの出会いを期待してショールを持った。うっとりとして公園の木蔭に入る。大気は光に満ち、カシスは芳香をはなす。彼は、疲れたというより、酔いしれ陶然として坐った。

ミッシェルは視た。光を、軽くうつろうまどろむその影を。彼は聴いた。何も、いや全てを。物音ひとつひとつを楽しんだ。彼は触れた。低い木の樹皮を。その奇妙な存在感に魅かれ、愛撫するようにさわった。この朝こそ、生まれでるときだったと彼は想う。

ミッシェルは、自己も時間も忘れていた。彼は気づく。今、感覚が思考と同じように強くなったことに。というのは、過去の奥底から、光、感覚が目覚めたからだ。目覚めた感覚は、彼の過去、歴史を再構成する。ミッシェルは叫ぶ。感覚はずっと生きていた！と。

ポケットからホメロスを取り出し、『オデュッセイア』の三節を読む。そのリズムに十分な糧を見出し、心ゆくまで楽しむ。かたわら精神は、感覚の幸福により、麻痺していた。

II. テキスト分析

この章、論理では説明できないミッシェルの感覚の目覚め、彼の人生で今まで体験したことのない感覚の発見、そしてその感覚は彼の存在そのものとなり、理性的、精神的なものが麻痺していく。このような理性により説明できないもの、非論理が、しごく論理的な文章、明晰で単純な文体で明解に明らかにされていく。非論理を追う論理の章ともいえようか。芸術の論理、技巧により、非論理がかろうじて均衡を保った文体ともいえよう。

レジュメの段落にしたがい、この過程をみてみよう。(頁、行は論末テキスト文のものです)

第一段落

この段落をさらに部分に分ける。

(0) p.16 l.l. 1-4

この章の冒頭は、章全体を示唆するようだ。ミッシェルは、かわらず、病の回復だけに専念していた。だから肉体についてのみ語る。精神と肉体の二つの生を同時にもつ力はなかったから。はじめ、こう語られているようにみえる。が、ある奇妙な一文に出会う。

「私が（精神を）無視するのは、この物語では、意志的なものだ。」 p.16 l. 2

ミッシェルの語る物語は、「序」にあるように、また精神の無視は、その場では現実であったと語られように、真実であるはずだ。にもかかわらず、上記の引用「この物語では」には、そこに虚構、あるいは物語の手際よい技巧をほのめかしているとみるのは、深読みだろうか。この深読みをあえて進め、分析していこうと想う。

(1) p.16 l.l. 5-11

まだよくなるには程遠いミッシェルの弱さについての語句の羅列が大幅に続く。汗ばみ、かぜ気味となり、熱が出て、朝からひどい疲れを感じ、とりわけ呼吸に苦しむ。全てに無関心となり、ただ上手に呼吸することに専念するエゴイストだ。しかし、この息切れは、その後も習慣化するという。すなわち、健康をとりもどした後のことをほのめかしている。

「その後ずっと長く、気をつけて呼吸しないと息切れをするようになったままだ。」 p.16 l. 11

回復には程遠い冒頭から、回復をほのめかすことでこの段落(1)はとじる。

(2) p.16 l. 12-p.17 l. 24

病的な感覚について語られる。それはむしろ神経症ともとれた。寒さと熱が交互におそう。

「私は、いつも暑くなったり、寒くなったりした。ばかばかしい程、大げさに着こんですぐ、汗ばむまでふるえて、ちょっと着こんだものをぬぐと、汗をかかなくなるやすぐにふるえだしてしまう。」 p.16 l.l. 15-18

さらに肉体の気温に対する敏感さについて、羅列される。体はこおりつき、汗をかいても大理石のように冷めたい。とても寒さに敏感で、足に一滴の水が落ちててもかぜをひく。くどい程の病的な感受性の説明は、むしろ感覚そのものを語ろうとしているようにみえる。すなわち、感覚の強調。さらに、その多様で微妙な変化を楽しんでいるかにみえる。だから…

「…しかし今日では、この感覚を官能的に享受している。あらゆる鋭敏な感覚は、体が強い
か弱いかで、快とも不快ともなりうる。私をかって苦しめたものすべてが、甘美なものとなっ
た。」 p.16 l. 22-p.17 l. 24

彼を苦しめる病的な感覚から語り始められたこの段落は、いつのまにか、その感覚が甘美なものになると結論される。そのとき苦しんでいたものが、未来には心持よいものと変わる。いずれも、病的な感覚そのものが治ったものではない。意味の流れとして、唐突な逆説をもくろむ。すなおな文意の流れる論理を、唐突な非論理が変えている。しかし、逆説的に文の流れは論理的にみえる。それは、段落のはじめと終わりの対立する文のあいだを、同様の語句をくりかえし埋めつくすことで、不快な感覚を、感覚そのものにすりかえていったからだ。段落(1)でも、回復が遠いという文から始め、回復をほのめかす文で終えている。二つの対立する反意の文のあいだに、読者をまどわせる語句の羅列をおき、対立を論理的帰結とおもわせるといえる。

(3) p.17 l.l. 25-29

窓を閉めて彼は寝た。寒さに鋭敏な病人には当然。しかしやがて、窓を大きくおし開いて寝る。

「…やがて何という甘美な喜びとともに、私のところに夜風が流れ、月光のさすのを感じた
ことだろう。」 p.17 l.l. 28-29

対立がそのまま残る文。もう錯覚を起こさせる必要はない。感覚の享受が、もう、主題になりおおせている。

第二段落 p.17 l. 30-p.19 l. 109

(1) p.17 l.l. 30-56

一刻も早くよくなりしたい。ついで元気になるのにぐずぐずしていない。急激な変化。もう彼は公園に出る。全てはつごうがよい。気候はおだやかで気持がよい。つごうよく、三日前からの強風はおさまっていた。マルスリーヌがショールを持つ。公園は、現在時制と現在分詞構文で、的確に描写される。^(註1)

この段落には、対立する語、句、文が散見される。まずは対色する色彩。公園を流れる水路の水の色は、バラ色と灰色。アラブ人のマントの色は白だが、日の陰の下では暗い色。次にミッシェルの気分。不快と快の対立。木蔭の下で奇妙な身ぶるいを感じるが何ら不快ではない。しかしマルスリーヌと顔見知りのアラブの子どもたちに出会うと、ふたたび不快がもどる。そして不快の原因は、妻マルスリーヌだという。マルスリーヌの知る子供と他の子供の対立。彼は、何らわからぬ勝手な気持から、他の子どもたちに興味をもつ。はじめ妻と出発したが、心の奥底で一人で公園に来ようと決める。妻との二人の散歩と一人の散歩の対立。このような対立は、こまかなものから、一つの意味をもつ決断にいたる。マルスリーヌとの対立だ。それはこのあと、さらに違う意味をおびていく。

(2) p.17 l.57-p.18 l.78

ここでも対立の叙述が続く。

バスルがショールをもち、ミッシェルは出かける。出発時は二人、しかし母親の手伝いをさせられることでバスルは去る。ミッシェルは一人となる。この対立のあいだに、バスルの妹と母親の的確な描写。さらにそこに人物達の動きが加わる。半過去時制と単純過去時制の軽妙な組合せが、生の躍動する空間をつくる。^(注2)そしてなお、ここで登場しないマルスリーヌと対立すると思われる文がある。

「バスルはおしゃべりをしてついてきた。犬のように忠実で従順に。」 p.17 l.60

犬のようなバスルと対立するのは、精神を象徴するかのマルスリーヌとみるのは、深読みだろうか。

(3) p.18 l.79-p.19 l.108

さらに対立は明確となる。

一人となったミッシェルにショールは重い。そこに、アシュールが来る。アシュール自身、片目だが美しいと、対立する描写をされる。終わりの、散歩の相手を変えるため、ベンチに坐り、一人、幸福な偶然の出会いを待つ決断までのあいだ、再び、公園の流れについての明確な説明がある。はじめ一人、次に二人、それをとりもつのは常にショール。そしてマルスリーヌぬきで一人で出かけると決める。そのあいだを人間と自然が必ず空間を埋める。これは、少しの違いはあるが、大きな段落二での小さな段落(1)、(2)、(3)で同様にくりかえされるパターンといえよう。そしてこまかい対立する語が大きな対立へとむかう。

大きな対立が、帰宅の後になされる。

妻に遠慮してアシュールを家に入れたいミッシェル、そして、夫を疲れさせ、気に入らないかと配慮して、病弱な子を今までつれて来なかったマルスリーヌ。二人のあいだでの互いに心づかいを示す対立のように見える。マルスリーヌは母性的でやさしい。バシルのように犬ではない。しかしミッシェルは、ほとんど説明のつかない結論を言う。

「私は、マルスリーヌに散歩の話をした。そして粗野にならぬよう、なぜ一人で外出したいかを理解させた。」 p.18 l.107-p.19 l.108

この記述はまったく論理性がない。エゴイスティックな自己主張としかとれない。どのように何を説明したかも定かではない。非論理が結論となる。対立は、ある論理と非論理となった。

第三段落 p.19 l.l. 109-139

(1) p.19 l.l. 109-125

この段落では、全てがよくなる。まだ続く寒さと熱により、夜、目を覚ますときもあるが、その夜はぐっすりねられた。そして心持よい感覚の喜びをあらわす語句が続く。

「よく休み、体は力と喜びにあふれ、楽しさを感じていた」 p.19 l.l. 111-112

「蔭の中に、恍惚として入った。」 p.19 l.115

「大気は光に満ちていた。」 p.19 l.115

「カシスはよい芳香を放っていた。」 p.19 l.115

「(見知らぬかすかな香りが) いたる方向から私のなかに入りこむようだ。私はそのせいで、心が高まっていった。」 p.19 l.l. 117-118

「楽に呼吸できた。」 p.19 l.118

「私の足取りは軽かった。」 p.19 l.118

「私は坐ったが、疲れているというより、酔い、陶然としていたから。」 p.19 l.119

前段落とちがい、描写はあまりない。彼の感じることで、空間は満ちている。それは、自然や人物の描写ではない。外出の象徴であるショールも、ただ偶然の出会いのための道具にすぎなくなる。

やがて彼は、木の樹皮をさわる。その記述は、単なる行為のそれではない。簡潔だが感覚の享受の体系である。

「私は視た。影はうつろいやすく軽い。それは地上に落ちず、そこにほとんど浮かびまどろ

んでいるようだ。ああ光よ！…私は聴く。何がきこえたか？ 何も、あるいは全てを。私は、物音ひとつひとつをたのしんでいた。

私は、あの小さい低い木を思い出す。その樹皮は、遠くから見ると、とても奇妙な存在感があったので、私はそれに触れようと意に反し立ち上がってしまった。私は愛撫するようにそれにさわった。そうすることで私はうっとりとしていた。

私は覚えている…ついにその朝こそ、私が生まれようとするときだったのか？」 p.19 LL 119-125

感覚の体系といった。「私は視た」、視覚である。「私は聴く」、聴覚。「触れる」、触覚。前段落に「み知らぬほのかな香り」は嗅覚だ。五感のうち味覚がないだけだ。そして感覚がミッシュェルを再生させる。

(2) p.19 LL 126-134

感覚の蘇生がさらに広がり意味をもつ。記述は論理的。a から e へのその展開をみよう。

- a. 自己も他者も時間も否定。すなわちそれまでの自己を失なう。

「私は、しばらく一人でいることを忘れていた。何も待ってはいない。時間をすら忘れていた。」 p.19 L 126

- b. というのは、感覚が思考と同じように強くなったから

「その日まで、あまりに考えるため、わずかしか感じる事がなかったと想われる。結果、次のことに驚いていた。私の感覚は、思考と同じように強くなっていたことに。」 p.19 LL 126-128

- c. 実は、この感覚は、幼年時代からあり、忘れ去られ、今、目覚めたのだ。

「このように思われたのは、…私の幼年時代の過去の奥底から、幾千という光、忘れ去られ、さ迷っていた幾千という感覚が目覚めたからだ。」 p.19 LL 129-130

- d. 感覚は、今までの「時間を忘れ」、新たな時間をつくる。

「新たに私のいだいた意識は、おぼつかないが、ある再認識を可能にした。そうだ、その後

目覚めた私の感覚は、ある物語（歴史）全体を見出すことができるようになり、あるひとつの過去が再構成された。」 p.19 LL 131-132

e. 感覚は、かくして、過去から蘇り生きつづける。

「これらの感覚は生きていた！生きていた！そして生き続けることをけしてやめてはいなかった。私の研究の年月をへて、隠れていたずるがしこい生があらわれてきた。」 p.19 LL 132-134

この感覚の蘇生は、このように、理性的、論理的に説明される。時間は一度失われ、感覚の一点に全ては照らされる。過去に光はむかい、過去の歴史は一度こわされ、再構築される。それが生まれ生き続ける感覚の生だ。まさしく、この章全体が、この段落のミッシェルの生の発見を導く巧妙な文の技とみえる。しかし、すなおに説明されているだろうか。「ずるがしこく、おぼつかない」(p.19 L 134, p.19(L) 131L) 認識ではないだろうか？ 非論理をそこに秘めているのではないだろうか。

(3) p.19 LL 135-139

ミッシェルはポケットからホメロスを取り出す。

「オデュッセイアの三節を再読、熟読し、次いでその韻律のなかに十分な糧をみつけ、そして心ゆくまでその喜びをむさぼり、本を閉じた。

身がふるえ、誰も味あうとは信じがたい程、ひときわ生々とした気持になり、精神は、幸福でぐったりと無感覚となった。」 p.19 LL 136-139

ホメロスは、一見、精神の回復を感じさせるが、むしろ逆だ。『オデュッセイア』を読み、十分な糧を見出す。「糧」は、二段落の冒頭では、「よい食事」を意味した。両義をもつこの語は、精神以外のものを喚起する。だからそれは、韻律の律動のなかにあり、心ゆくまで喜びをむさぼるためである。「糧」は、むしろ肉体を養い、その喜びで肉体はふるえ、かつてないほど生々として、結果、その幸福感の中で、精神は、麻痺してしまう。

この章は「二つの生、精神と肉体について語る力はない」で始まった。対立する語句や文などのからくりの中、文体の論理の中、段々と常識的な肉体と精神の均衡が破られる。ミッシェルは、エゴスティックな健康の回復をへて、外の自然や人間の中に出ていき、マルスリーヌに象徴される精神を説明つかぬ感情で否定し、終わりに感覚の目覚めを発見、そして一見論理的に、肉体と感

覚の讚美に酔い、理性と論理を拒み、非論理ともいえる力で、感覚の力で、精神を麻痺させる。

対立するものは、肉体と精神であった。肉体の感覚の享受が精神を破壊する語り、これはむしろ哲学的であり、「インモラリスト」という主題をかいまみさせるものだ。その不安な不均衡に文体という芸術がかるうじて均衡を与えている。非論理の勝利をみちびく論理ともいえるだろうか。

注

時制について言及した。立ち入った分析は今だ難しいので、英訳文との並置にとどめる。注1の現在時制の駆使は、客観的描写と人物の動きに、英訳ともども十分生かされている。しかし、注2の絶妙な単純過去と半過去時制による生の躍動する空間をつくる文は、英訳では、進行形などによる工夫はあるが、難しいことがみてとれる。動詞類はイタリックで示す。

(注1) Jardin Public... Une très large allée le *coupait*, ombragée par deux rangs de cette espèce de mimosas très hauts qu'on *appelle* là-bas des cassies. Des bancs, à l'ombre de ces arbres. Une rivière canalisée, *je veux* dire plus profonde que large, à peu près droite, *longeant* l'allée; puis d'autres canaux plus petits, *divisant* l'eau de la rivière, la *menant*, à travers le jardin, vers les plantes; l'eau lourde *est* couleur de la terre, couleur d'argile rose ou grise. Presque pas d'étrangers, quelques Arabes; ils *circulent*, et, dès qu'ils *ont quitté* le soleil, leur manteau blanc *prend* la couleur de l'ombre.

英訳

The public gardens!... A very wide path *runs* through the middles of them, shaded by two rows of that kind of very tall mimosa which out there *is called* cassia. Benches *are placed* in the shadow of the trees. A canalized river-one, I *mean*, that *is* not wide so much as deep, and almost straight — *flows* alongside the path; other smaller channels *take* the water from the river and *convey* it through the gardens to the plants; the thick, heavy-looking water *is* the same colour as the earth — the colour of pinkish, greyish clay. Hardly any foreigners *walk* here — only a few Arabs; as they *pass* out of the sunlight, their white cloaks *take* on the colour of the shade.

(注2) Le lendemain, elle *avait* à soirtir vers dix heures; j'en *profitai*. Le petit Bachir, qui *manquait* rarement de venir le matin, *prit* mon châte; je *me sentais* alerte, le coeur léger. Nour *étions* presque seuls dans l'allée; je *marchais* lentement, m'*asseyais* un instant, *repartais*. Bachir *suivait*, bavard; fidèle et souple comme un chien. Je *parvins* à l'endroit du canal où *viennent* laver les laveuses; au milieu du courant une pierre plate *est posée*; dessus, une fillette couchée et le visage penché vers l'eau, la main dans le courant, y *jetait* ou y *rattrapait* des brindilles. Ses pieds nus *avaient plongé* dans l'eau; ils *gardaient* de ce bain la trace humide, et là sa peau *paraissait* plus foncée. Bachir *s'approcha* d'elle et lui *parla*; elle *se retourna*, me *sourit*, *répondit* à Bachir en arabe. — C'est ma soeur, me *dit-il*; puis il m'*expliqua* que sa mère *allait* venir laver du linge, et que sa petite soeur l'*attendait*. Elle *s'appelait* Rhadra, ce qui *voulait* dire Verte, en arabe. Il *disait* tout cela d'une voix charmante, claire, enfantine autant que l'émotion que j'en *avais*.

《Elle demande que tu lui donnes deux sous》, *ajouta-t-il*.

Je lui en *donnai* dix et m'*apprêtais* à repartir, lorsque *arriva* la mère, la laveuse. *C'était* une femme admirable, pesante, au grand front tatoué de bleu, qui *portait* un panier de linge sur la tête, pareille aux canéphores antiques, et, comme elles, voilée simplement d'une large étoffe bleu sombre qui *se relève* à la ceinture et retombe d'un coup jusqu'aux pieds. Dès qu'elle *vit* Bachir, elle *l'apostropha* rudement. Il répondit avec violence; la petite fille *s'en mêla*; entre eux trois *s'engagea* une discussion des plus vives. Enfin, Bachir, comme vaincu. *me fit* comprendre que sa mère *avait* besoin de lui ce matin; il *me tendit* mon châle tristement et je *dus* repartir tout seul.

英 訳

The next day, she *had* to go out about ten o'clock; I *took* advantage of this. Little Bachir, who rarely *failed* to come of a morning, *carried* my shawl; I *felt* active, light-hearted. We *were* almost alone in the garden path. I *walked* slowly, sometimes *sat* down for a moment, then *started* off again. Bachir *followed*, *chattering*; as faithful and as obsequious as a dog. I *reached* a part of the canal where the washerwomen *come* down to wash; there *was* a flat stone placed in the middle of the stream, and upon it *lay* a little girl, face downwards, *dabbling* with her hand in the water; she *was* busy *throwing* little odds and ends of sticks and grass into the water and *picking* them out again. Her bare feet *had dipped* in the water; there *were* still traces of wet on them and there her skin *showed* darker. Bachir *went* up and *spoke* to her; she *turned* round, *gave* me a smile and *answered* Bachir in Arabic. 'She is my sister,' he *explained*; then he *said* his mother *was coming* to wash some clothes and that his little sister *was waiting* for her. She *was called* Rhadra in Arabic, which *meant* 'Green'. He *said* all this in a voice that *was* as charming, as clear, as childlike, as the emotion I *felt* in hearing it.

'She wants you to give her two sous,' he *added*.

I *gave* her fifty centimes and *prepared* to go on, when the mother, the washerwoman, *came* up. She *was* a magnificent, heavily built woman, with a high forehead tatoed in blue; she *was carrying* a basket of linen on her head and *was* like a Greek caryatid; like a caryatid too, she *was* simply *draped* in a wide piece of dark blue stuff, *lifted* at the girdle and *falling* straight to the feet.

As soon as she *saw* Bachir, she *called* out to him roughly. He *made* an angry answer; the little girl *joined* in and the three of them *started* a violent dispute. At last Bachir *seemed* defeated and *explained* that his mother *wanted* him that morning; he *handed* me my shawl sadly and I *was obliged* to go of by myself.

Ⅲ. マニユスクリの分析

この章では、物語と意味の自然な流れに逆行する、あるいはその流れの唐突な変化を自然な流れとみせるための巧妙な文体操作がある。また、ひとつの思想の開陳にむかって無理に、しかし急激に進む論理の流れをつくる必要からくる文体操作もある。したがって、ある“あせり”や思想の語り過ぎもある。それら、直接テキスト分析にかかわるものには※をつけた。

また、文体上の問題から書きかえられたものも多い。読者には笑止すべき面が多々あると思うが、何故書きかえられたかを、私の仏語能力の範囲内であえて類推してみた。さらに、単に文体をととのえるために書きかえられたものは、漠然と明確化あるいは簡素化：(style) clair ou simple と附記した。また書き言葉としての文章体への書きかえなどは、上品な文体ということで

(style) soutenu とした。これらも識者のご批判をうけることになるだろう。しかしいずれにしろ、あえて書きかえの理由を想像し、それぞれにつけてみた。

ページ数、行数は、拙論末のテキストのものである。始めにマニュスクリ文、次に矢印によりテキスト文を記した。マニュスクリ→テキスト。書きかえが2回以上あるばあい、最後の文がテキストとなる。マニュスクリで線などにより消された文、黒くおおわれたものもすかして見ることとで再現した。これらは×印で示した。/×…/。

p.16 l. 4 il serait temps d'y songer
→pensais-je, j'y songerai plus tard.
clair

p.17 l. 7 la fatigue excessive → d'affreuse lassitude
呼吸の苦しみと倦怠をとまなう疲れ故. lassitude の方が適切。

p.16 l. 10 ne se faisait pas sans saccades
→(mes expirations) se faisaient avec deux saccades
clair et simple

p.16 l. 11 longtemps → complètement
complètement の方が主語 volonté にあい意志的。

p.16 l. 14 (à la maladie) particulièrement → ナシ

p.16 l. 13 ナシ → aujourd'hui

p.17 l. 24 peut devenir → m'est devenu
より強調された。

p.17 l. 26 (les conseils) du livre que j'ai (de T...)
clair et simple.

p.17 l. 28 fermée → refermée
clair.

p.17 l. 31 mes efforts → des soins constants
より現実感をだす。

p.17 l. 31 ナシ → en effet

p. 17 l. l. 31-32 me sentir bien → aller mieux

より客観的。

* p. 17 l. l. 32-34 Dans les derniers jours de janvier, délaissant enfin ma terrasse, je pus descendre, sortir dans le jardin public (jusqu' alors j'avais craint l' essoufflant escalier)
→ Jusqu' alors, craignant l'essoufflement de l'escalier, je n' avais pas osé quitter la terrasse; dans les derniers jours de janvier, enfin, je descendis, m'aventurai dans le jardin.
論理的で明解な文へ。

p. 17 l. 38 grande → large

p. 17 l. 38 /×plantée/→ ombragée

* p. 17 l. 39 (...des cassies. と Des bancs のあいだに鉛筆書で余白を使い) découverte de la sensualité lui réimaginer une histoire. → ナシ
後の感覚の目覚めと人生の再構成のテーマがはやまってできた。

p. 17 l. 40 /×canal/→ canalisée

p. 17 l. 41 /×de petits/autres canaux → d' autres canaux plus petits

p. 17 l. l. 41-42 /×l' amènent à travers le jardin, bien repartie et conduite, l'eau...
une fraîcheur constante/
→la menant à travers le jardin vers les plantes
clair et simple

p. 17 l. 42 /×la terre est/(couleur d'argile)→ ナシ

p. 17 l. 43 /×Peu d'étrangers/→ Presque pas d'étrangers

p. 17 Marceline m'accompagnait portant un châle. Il était/×quatre/trois heures du soir.
Le vent/×qui/souvent/×souffle/violent dans ce pays et qui m'avait beaucoup gêné, ces derniers jours était tombé. La douceur d'air était charmante.
(以上の用紙は絵入りホテル便せん。ホテル名と住所, Hôtel & Vurhous, Arco Jul, Nebdeck Bestizer, Arneau Lausanne)
→ p. 17 l. l. 35-37 にあたる。

p. 17 l. 46 (aucun malaise; と au contraire のあいだに)/×mais ce frisson n'avait rien/→
ナシ

p. 17 l. 52 /×Marceline/ → elle

p. 17 l. 52 *contraint* → *géné*

p. 17 l. 53 *aurait*/~~*pris*~~/
→ *aurait voulu le porter*

p. 17 l. 55 *préférés* → *protégés*

p. 17 l. 57 (*Le lendemain*) *Matin* → ナシ

p. 17 l. 58 ナシ → *le matin*

p. 17 l. 58 *le (châte)* → *mon*

※p. 17 l. 60 ナシ → *Bachir suivait, bavard; fidèle souple comme un chien*

p. 17 l. 61 *une pierre polie divisant l'eau.*
→ *au milieu du courant une pierre plate est posée*

p. 17 l. l. 62-63 *une fillette était dessus penchée qui de sa main dans le courant jetait ou rattrapait des brindelles*
→ *dessus une fillette couchée et le visage penché vers l'eau, la main dans le courant, y jetait ou y rattrapait des brindelles*

p. 17 l. 64 ナシ → *ils gardaient de ce bain la trace humide.*

p. 18 l. 66 (*ma*)/~~*petite*~~/~~*soeur*~~ → *ma soeur*

※p. 18 l. 66 (*dit-il* と *puis* のあいだに) *elle était bête; elle ne*/~~*sait*~~/~~*parle pas le français.*~~
→ ナシ

多分、犬のようなバシルの方が、美しく効果的なので、妹についてのこの節は削除。精神性のない妹をバシルの他、さらに加えようという意図だろうが。

p. 18 l. 68 /~~*plus*~~/~~*enfantine*~~ → ナシ

p. 18 l. 71 /~~*parte*~~/ → *m'apprêtais à repartir*

p. 18 l. l. 72-73 *qui portait à la façon pareille aux cariatides de s — autour d'une torse nue canéphore antique.*

→ *qui portait un panier de linge sur la tête, pareille aux canéphores antiques.*

p. 18 l. 74 /~~*légère*~~/~~*et polissée*~~ → *bleu sombre*

p. 18 l. 74 se ramène → se relève

p. 18 l. 75 (aux pieds. と Dès qu'elle のあいだに) Cette étoffe était bleue foncé, presque noire; elle avait aux oreilles d'énormes anneaux de métal. → ナシ

p. 18 l. 81 (qui) pourrait → ナシ

p. 18 l. 83 /×presque/(beau) → très → ナシ

* p. 18 (p. 18 l. 83 から p. 18 l. 85 までのかわりに次の長文あり)

Hélas! Je dus en voir plus d'un dans ce pays sans compter presque autant d'aveugles. Réverbération de midi, la froideur trop subite des nuits en sont causes — mais les mouches surtout qu'on ne tue quère, trop nombreux et parce que la religion la défend — qui partout l'ophtalmie d'un oeil sur l'autre; j'ai vu plus tard ces mouches, sur le visage des tous petits posées, le petit ne chasse point s'approcher des yeux et sur le lisière des paupières pour bientôt causer comme des vaches à l'abreuvoir, y venir boire. Mon nègre se nommait ashour; il portait au coin de l'oeil court la cicatrice encore de l'occasion qu'on fait dans l'espoir de sauver cet oeil. — Il me raconta cela et d'autres choses — Il parlait /×le français/remarquablement et me dit que depuis deux ans pleins il ne retournait plus à l'école, mais qu'il y avait bien travaillé; → ナシ

美しい自然への感覚の目覚めにはふさわしくない現実的叙述。また、この章の論理的展開には饒舌すぎる。したがって削除。しかし、ジッドの社会性を思い出させる。

p. 18 l. 85 exquis → plaisant

p. 18 l. 86 si bien → trop

p. 18 l. 87 avec mon châte → au jardin

p. 18 l. 90 (j') aurais voulu → je désirais
désirer の方が強意。

p. 18 l. 91 (en aurait) dit → pensé
penser の方が強意。

p. 18 l. 92 ナシ → occupée

p. 18 l. 97 au juste encore → encore au juste

p. 19 l. 105 Bachir → Ashour
単なるまちがえ。

p. 19 l. 113 je vois que c'était surtout pour prétexte à lier connaissance avec celui qui me le portait

→ comme prétexte à lier connaissance avec celui qui me le portait.
clair et simple

* p. 19 l. 114 (... aussitôt の後に) L'air était lumineux. → p. 19 l. 115 へ
ombre と lumineux の対立を接近。

p. 19 l. 115-116 Ils sont couverts de fleurs avant d'avoir aucunes feuilles, ils répandent une odeur douce et poivrée.

→ Les cassies, dont les fleurs viennent très tôt avant les feuilles embaumaient.
clair et simple

p. 19 l. 120 flottant → légère

flottant の方が、影が地に落ちない意としてはよいようにみえるが、mobile の対語としては、légère の方がよい。

p. 19 l. 120 mais → et

p. 19 l. 122 m'aparut → me parut

p. 19 l. 123 toucher → palper

* p. 19 l. 126 oubliais → oubliai

J'avais oublié que j'étais seul, n'attendrais rien, oubliai l'heure.

大過去, 半過去, そして単純過去により, すでに一人であること, 自己を忘れていて, 次に何も (他者) を待たずにいる状態を経て, 時間がぼんと失なわれる。

soutenu, clair et simple.

p. 19 l. 127 et → pour

p. 19 l. 127 pensé → penser

p. 19 l. 129 (Il me semblait の後に) avoir si peu senti → ナシ

p. 19 l. 130 /×égarées/ → oubliées

→ égarées
soutenu

p. 19 l. 131 /×inquiète/ → curieuse → inquiète

後に続く物語には l'inquiète reconnaissance の方が適切。

p. 19 l. 132 /×à présent/ → désormais

p. 19 l. 132 /×découvraient/ → retrouvaient.

2行後の découvraient と重複をさけた。

p. 19 ll. 137-138 dont je me délectais encore

→ m'en délectant à loisir

p. 19 l. 139 pouvait → pût

p. 19 l. 139. → ...

《テキスト文》

プレイアード版, 「レシ, ソチ, ロマン」,

pp. 386-391

III

1 Je vais parler longuement de mon corps. Je vais en parler tant, qu'il vous semblera
2 tout d'abord que j'oublie la part de l'esprit. Ma négligence, en ce récit, est volontaire;
3 elle était réelle là-bas. Je n'avais pas de force assez pour entretenir double vie; l'esprit
4 et le reste, pensais-je, j'y songerai plus tard, quand j'irai mieux.

5 J'étais encore loin d'aller bien. Pour un rien j'étais en sueur et pour un rien je
6 prenais froid; j'avais, comme disait Rousseau, 《la courte haleine》; parfois un peu de
7 fièvre; souvent, dès le matin, un sentiment d'affreuse lassitude, et je restais, alors,
8 prostreé dans un fauteuil, indifférent à tout, égoïste, m'occupant très uniquement à
9 tâcher de bien respirer. Je respirais péniblement, avec méthode, soigneusement; mes
10 expirations se faisaient avec deux saccades, que ma volonté surtendue ne pouvait
11 complètement retenir; longtemps après encore, je ne les évitais qu'à force d'attention.
12 Mais ce dont j'eus le plus à souffrir, ce fut de ma sensibilité malade à tout changement
13 de température. Je pense, quand j'y réfléchis aujourd'hui, qu'un trouble nerveux
14 général s'ajoutait à la maladie; je ne puis expliquer autrement une série de phénomènes,
15 irréductibles, me semble-t-il, au simple état tuberculeux. J'avais toujours ou trop chaud
16 ou trop froid; me couvrais aussitôt avec une exagération ridicule, ne cessais de
17 frissonner que pour suer, me découvrais un peu, et frissonnais sitôt que je ne transpirais
18 plus. Des parties de mon corps se glaçaient, devenaient, malgré la sueur, froides au
19 toucher comme un marbre; rien ne les pouvait plus réchauffer. J'étais sensible au froid
20 à ce point qu'un peu d'eau tombée sur mon pied, lorsque je faisais ma toilette,
21 m'enrhumait; sensible au chaud de même... Je gardai cette sensibilité, la garde encore,
22 mais, aujourd'hui, c'est pour voluptueusement en jouir. Toute sensibilité très vive peut,
23 suivant que l'organisme est robuste ou débile, devenir, je le crois, cause de délice ou de

24 gêne. Tout ce qui me troublait naguère m'est devenu délicieux.

25 Je ne sais comment j'avais fait jusqu'alors pour dormir avec les vitres closes; sur les
26 conseils de T... j'essayai donc de les ouvrir la nuit; un peu, d'abord; bientôt je les
27 poussai toutes grandes; bientôt ce fut une habitude, un besoin tel que, dès que la fenêtre
28 était refermée, j'étouffais. Avec quelles délices plus tard sentirai-je entrer vers moi le
29 vent des nuits, le clair de lune...

30 Il me tarde enfin d'en finir avec ces premiers bégaiements de santé. Grâce à des
31 soins constants en effet, à l'air pur, à la meilleure nourriture, je ne tardai pas d'aller
32 mieux. Jusqu'alors, craignant l'essoufflement de l'escalier, je n'avais pas osé quitter la
33 terrasse; dans les derniers jours de janvier, enfin, je descendis, m'aventurai dans le
34 jardin.

35 Marceline m'accompagnait, portant un châle. Il était trois heures du soir. Le vent,
36 souvent violent dans ce pays, et qui m'avait beaucoup gêné depuis trois jours, était
37 tombé. La douceur d'air était charmante.

38 Jardin public... Une très large allée le coupait, ombragée par deux rangs de cette
39 espèce de mimosas très hauts qu'on appelle là-bas des cassies. Des bancs, à l'ombre de
40 ces arbres. Une rivière canalisée, je veux dire plus profonds que large, à peu près droite,
41 longeant l'allée; puis d'autres canaux plus petits, divisant l'eau de la rivière, la menant,
42 à travers le jardin, vers les plantes; l'eau lourde est couleur de la terre, couleur d'argile
43 rose ou grise. Presque pas d'étrangers, quelques Arabes; ils circulent, et, dès qu'ils ont
44 quitté le soleil, leur manteau blanc prend la couleur de l'ombre.

45 Un singulier frisson me saisit quand j'entraï dans cette ombre étrange; je
46 m'enveloppai de mon châle; pourtant aucun malaise; au contraire... Nous nous assimes
47 sur un banc. Marceline se taisait. Des Arabes passèrent; puis survint une troupe
48 d'enfants. Marceline en connaissait plusieurs et leur fit signe; ils s'approchèrent. Elle
49 me dit des noms; il y eut des questions, des réponses, des sourires, des moues, de petits
50 jeux. Tout cela m'agaçait quelque peu et de nouveau revint mon malaise; je me sentis
51 las et suant. Mais ce qui me gênait, l'avouerai-je, ce n'étaient pas les enfants, c'était elle.
52 Oui, si peu que ce fût, j'étais gêné par sa présence. Si je m'étais levé, elle m'aurait suivi;
53 si j'avais enlevé mon châle, elle aurait voulu le porter; si je l'avais remis ensuite, elle
54 aurait dit : «Tu n'as pas froid?» Et puis, parler aux enfants, je ne l'osais pas devant elle;
55 je voyais qu'elle avait ses protégés; malgré moi, mais par parti pris, moi je m'intéressais
56 aux autres. — Rentrons, lui dis-je; et je résolus à part moi de retourner seul au jardin.

57 Le lendemain, elle avait à sortir vers dix heures; j'en profitai. Le petit Bachir, qui
58 manquait rarement de venir le matin, prit mon châle; je me sentais alerte, le coeur léger.
59 Nous étions presque seuls dans l'allée; je marchais lentement, m'asseyais un instant,
60 repartais. Bachir suivait, bavard; fidèle et souple comme un chien. Je parvins à
61 l'endroit du canal où viennent laver les laveuses; au milieu du courant une pierre plate
62 est posée; dessus, une fillette couchée et le visage penché vers l'eau, la main dans le
63 courant, y jetait ou y rattrapait des brindilles. Ses pieds nus avaient plongé dans l'eau;
64 ils gardaient de ce bain la trace humide, et là sa peau paraissait plus foncée. Bachir
65 s'approcha d'elle et lui parla; elle se retourna, me sourit, répondit à Bachir en arabe. —

66 C'est ma soeur, me dit-il; puis il m'expliqua que sa mère allait venir laver du linge, et
67 que sa petite soeur l'attendait. Elle s'appelait Rhadra, ce qui voulait dire Verte, en
68 arabe. Il disait tout cela d'une voix charmante, claire, enfantine autant que l'émotion
69 que j'en avais.

70 «Elle demande que tu lui donnes deux sous», ajouta-t-il.

71 Je lui en donnai dix et m'apprêtais à repartir, lorsque arriva la mère, la laveuse.
72 C'était une femme admirable, pesante, au grand front tatouée de bleu, qui portait un
73 panier de linge sur la tête, pareille aux canéphores antiques, et, comme elles, voilée
74 simplement d'une large étoffe bleu sombre qui se relève à la ceinture et retombe d'un
75 coup jusqu'aux pieds. Dès qu'elle vit Bachir, elle l'apostropha rudement. Il répondit
76 avec violence; la petite fille s'en mêla; entre eux trois s'engagea une discussion des plus
77 vives. Enfin, Bachir, comme vaincu, me fit comprendre que sa mère avait besoin de lui
78 ce matin, il me tendit mon châle tristement et je dus repartir tout seul.

79 Je n'eus pas fait vingt pas que mon châle me parut d'un poids insupportable; tout
80 en sueur, je m'assis au premier banc que je trouvai. J'espérais qu'un enfant
81 surviendrait qui me déchargerait de ce faix. Celui qui vint bientôt, ce fut un grand
82 garçon de quatorze ans, noir comme un Soudanais, pas timide du tout, qui s'offrit de
83 lui-même. Il se nommait Ashour. Il m'aurait paru beau s'il n'avait été borgne. Il aimait
84 à causer, m'apprit d'où venait la rivière, et qu'après le jardin public elle fuyait dans
85 l'oasis et la traversait en entier. Je l'écoutais, oubliant ma fatigue. Quelque plaisant que
86 me parût Bachir, je le connaissais trop à présent, et j'étais heureux de changer. Même,
87 je me promis, un autre jour, de descendre tout seul au jardin et d'attendre, assis sur un
88 banc, le hasard d'une rencontre heureuse...

89 Après m'être arrêté plusieurs instants encore, nous arrivâmes, Ashour et moi,
90 devant ma porte. Je désirais l'inviter à monter, mais n'osai point, ne sachant ce qu'en
91 aurait pensé Marceline.

92 Je la trouvai dans la salle à manger, occupée près d'un enfant très jeune, si malingre
93 et d'aspect si chétif, que J'eus pour lui d'abord plus de dégoût que de pitié. Un peu
94 craintivement, Marceline me dit:

95 «Le pauvre petit est malade.

96 — Ce n'est pas contagieux, au moins? Qu'est-ce qu'il a?

97 — Je ne sais pas encore au juste. Il se plaint de partout un peu. Il parle assez mal
98 le français; quand Bachir sera là demain, il lui servira d'interprète... Je lui fais prendre
99 un peu de thé...»

100 Puis, comme pour s'excuser, et parce que je restais là, moi, sans rien dire:

101 «Voilà longtemps, ajouta-t-elle, que je le connais; je n'avais pas encore osé le faire
102 venir; je craignais de te fatiguer, ou peut-être de te déplaire.

103 — Pourquoi donc? m'écriai-je; amène ici tous les enfants que tu veux, si ça t'amuse!»
104 Et je songeai, m'irritant un peu de ne l'avoir point fait, que j'aurais fort bien pu faire
105 monter Ashour.

106 Je regardais ma femme cependant; elle était maternelle et caressante. Sa tendresse
107 était si touchante que le petit partit bientôt tout réchauffé. — Je parlai de ma

108 promenade et fis comprendre sans rudesse à Marceline pourquoi je préférais sortir seul.
 109 Mes nuits à l'ordinaire étaient encore coupées de sursauts qui m'éveillaient glacé ou
 110 trempé de sueur. Cette nuit fut très bonne et presque sans réveils. Le lendemain matin
 111 j'étais prêt à sortir dès neuf heures. Il faisait beau; je me sentais bien reposé, point
 112 faible, joyeux, ou plutôt amusé. L'air était calme et tiède, mais je pris mon châle
 113 pourtant, comme prétexte à lier connaissance avec celui qui me le porterait. J'ai dit que
 114 le jardin touchait notre terrasse; j'y fus donc aussitôt.

115 J'entrai avec ravissement dans son ombre. L'air était lumineux. Les cassies, dont
 116 les fleurs viennent très tôt avant les feuilles, embaumaient — à moins que ne vint de
 117 partout cette sorte d'odeur légère inconnue qui me semblait entrer en moi par
 118 plusieurs sens et m'exaltait. Je respirais plus aisément d'ailleurs; ma marche en était
 119 plus légère; pourtant au premier banc je m'assis, mais plus grisé, plus étourdi que las.
 120 Je regardai. L'ombre était mobile et légère; elle ne tombait pas sur le sol, et semblait
 121 à peine y poser. O lumière! — J'écoutai. Qu'entendis-je? Rien; tout; je m'amusais de
 122 chaque bruit. — Je me souviens d'un arbuste, dont l'écorce, de loin, me parut de
 123 consistance si bizarre que je dus me lever pour aller la palper. Je la touchai comme on
 124 caresse; j'y trouvais un ravissement. Je me souviens... Etait-ce enfin ce matin-là que
 125 j'allais naître?

126 J'avais oublié que j'étais seul, n'attendais rien, oubliai l'heure. Il me semblait avoir
 127 jusqu'à ce jour si peu senti pour tant penser, que je m'étonnais à la fin de ceci: ma
 128 sensation devenait aussi forte qu'une pensée.

129 Je dis : Il me semblait — car du fond du passé de ma première enfance se
 130 réveillaient enfin mille lueurs. de mille sensations égarées. La conscience que je
 131 prenais à nouveau de mes sens m'en permettait l'inquiète reconnaissance. Oui, mes
 132 sens, réveillés désormais, se retrouvaient toute une histoire, se recomposaient un
 133 passé. Ils vivaient! ils vivaient! n'avaient jamais cessé de vivre, se découvraient, même
 134 à travers mes ans d'étude, une vie latente et rusée.

135 Je ne fis aucune rencontre ce jour-là, et j'en fus aise; je sortis de ma poche un petit
 136 Homère que je n'avais pas rouvert depuis mon départ de Marseille, relus trois phrases
 137 de l'*Odyssée*, les appris, puis, trouvant un aliment suffisant dans leur rythme et m'en
 138 délectant à loisir, fermai le livre et demurai, semblant plus vivant que je n'aurais cru
 139 qu'on pût être, et l'esprit engourdi de bonheur...